



『中坊公平・私の事件簿』

著 者：中坊公平
 発 行：集英社新書
 発行年：2000年

社会には、常に時代の風が吹いている。こうした社会の風を鋭く読みとり、その方向を見定めてチャンスをも素早く自分のものにするには、ビジネスであれ、勉学であれ、大変重要なことである。

こうした時代の風は流動的な社会とともに移り変わっていくのが常であり、そのためにすぐれた思想や言葉も旬が過ぎれば、次々と新しい言葉に取って代わられる。それはそれで正しいのだが、時代や社会にかかわらず、いつの時にも人の心にずしりと響く真実の言葉もある。その言葉は、人種を超えて世界中の人々の心を動かすほどのパワーをもち、時として時代を超えて受け継がれる。そうした言葉の多くは、実に単純で明快な短い言葉であったりもする。いわゆる格言や名句といった部類がこれに当たるが、この新書には、中坊氏によるきわめて明快な言葉がちりばめられているように感じられる。

数々の事件を手がけた弁護士としての豊富な経験談が淡々と描かれていく本書で、氏の言葉は、おわりの部分でこうしめくくられる。「人間というのは、ただひたすら、懸命に、ひたむきに生きていかなければならない。ひたむきさがない人間には心を揺り動かされない。」

この言葉が、氏の生き方の姿勢を象徴しており、この一言は心の奥までまっすぐに突き刺さる。本書の内容そのものは、裁判をめぐる話であり、受け取り手の反応もさまざまであろう。しかしここで言いたいのは、真摯な生き方を貫く氏の哲学が表された言葉は、非常に短い、他人の心を確かに打つということである。そしてまた、その言葉に共感し、勇気づけられる人がいるということである。

「しかし、この道も険しく、登るには力不足のことも多い。それでも私は、終着駅まで一歩でも登り詰めようと思っている。」

こうした言葉によって、社会の風にただ流されるのではなく、ひとつの信念とともに生を綴っていくこともまた重要なのだと気づかされた。